

最高法院の前でのステファノの弁明

新生キリスト教会は聖霊のめざましい働きの中で急激に成長していったが、成長するに連れて、12使徒だけではどうしても管理することができない組織上の問題が出てきた。教会内の貧しいやもめたちへの日々の配給に不公平があるとい苦情をきっかけに、教会は七人の役員を立て問題の解決に当たさせた(使徒6:1?7)。

ステファノはその七人の中の一人であるが、彼は単なる実務型のすぐれた指導者であっただけでなく、聖霊と知恵に満ちた熱烈な伝道者でもあった。彼は外地帰りのユダヤ人を対象にイエス・キリストの福音を宣べ伝えたが、伝統主義者たちからモーセの律法や先祖から伝えられてきた慣例を否定し、神聖な神殿を汚す者だと訴えられて逮捕され、最高法院の前に引き出された。

最高法院の前でのステファノの態度は神々(こうごう)しく、その弁明は実に熱烈であった。彼は民族の父祖アブラハムの召命から始まり、救い主キリストに至るまでの二千年の神の救済の歴史を語る。父祖アブラハムに与えられたメシアによる世界救済の約束はイサク、ヤコブ、ヨセフへと受け継がれ、モーセの時代に選民イスラエルへと受け継がれていく。

アブラハムから出るであろうメシアによる世界救済の約束(神の契約)は、イスラエルの民の度重なる不信仰と背信の歴史の中で挫折するかに見えたが、神の恵みと忍耐の中で、幕屋礼拝、のちに神殿礼拝を通して連綿として受け継がれていった。

幕屋礼拝(神殿礼拝)の中心は犠牲制度にあった。すなわち厳粛な祭(特に過越の祭および贖罪の日の儀式)の度毎に犠牲の動物(羊や牛)がささげられ、その血が至聖所の契約の箱のふた(カッポーレース贖罪所と呼ばれた)の上に注がれた。それは聖なる神の前における身代わり(罪)の贖いを象徴していた。荒野の幕屋時代から恒久的な神殿時代まで、この儀式は繰り返し繰り返行なわれた。

しかし儀式はあくまでも儀式であって、それ自体が目的なのではない。それはやがて来るべきメシア(救い主)による人類の罪の贖いを象徴し指し示していた。そして、そのメシアすなわちイエス・キリストが到来し、世の罪を取り除く神の小羊」として十字架の上で血を流され、罪の贖いを全うされたとき、旧約のすべての儀式および神殿の使命は終わった。今や神は、人の手によって造られた幕屋や神殿にではなく、イエス・キリストにおいて私たちを招き、受け入れてくださるのである——これがステファノが語り、初代教会が宣べ伝えた福音のメッセージであった。

これはモーセの律法と神殿を至高のものとする最高法院やユダヤ民族主義者たちにとって聞くに耐えない主張であった。彼らは激しい怒りをもってス

テファノをめぐって殺到し、彼を神聖冒瀆の罪で石打ちの刑をもって殺害したのである。ステファノはキリスト教会最初の殉教者となった。しかしその死は無駄ではなかった。迫害の首謀者サウロはやがて回心し、キリスト教会最大の使徒になるのである。